

現代の村落住民の生活行動を扱ったのが最後の2章であるが、藤井正は第24章で「大都市圏縁辺部農村における日常生活圏」を、京都府加茂町の例で検討した。加茂町はもともと奈良市と結びつきの強い農村であったが、1980年代からの住宅開発により、大阪市へ通勤者が増加した。これまでの考え方では、商業・飲食・サービス施設の利用などに基づく日常生活圏も大阪都心との結合関係が強化されるというものであったが、結果として奈良駅周辺や西大寺駅周辺、幹線道路ぞいなどに立地した諸施設も利用され、日常生活圏として大都市圏が多核化しているという。

内容の説明がいささか長くなったが、以上の紹介からも理解されるように、本書で取りあげられている農山漁村研究は多様であり、地理学における農山村研究の幅広さを感じさせる。現代の農山漁村は多様であり、しかも常に変化しているだけに、それをめぐる課題も多い。本書で示されたように、さまざまな側面から異なった視点で分析を蓄積し、印刷物として世に問うことが、今後の地理学の発展のために必要と思われる。

序論でも述べられているように、本書の執筆者の多くは、歴史的観点から農山漁村の研究を進めてきており、このことから多くの論文を編集したものにもかかわらず、全体を通して一定の秩序が保たれている。その一つは、史料や地図、文献の検討が伝統的方法に基づいて手堅く実証的に行なわれていることであろう。それだけにマクロなスケールの研究は少なく、小地域の克明な研究が多い。しかし、そこで得られた知見は、他の地域の状況にも通ずるし、一般化できる可能性も十分もっているように思える。そのような意味では、ここで取りあげられたミクロスケールの研究に基づいて、マクロスケールの研究が今後さらに発展することが期待される。その点では、長年の村落の実証的研究に基づいて、廃村の分布条件を検討した坂口の研究や、農村家屋の発展様式を示した杉浦の研究が魅力的に思われる。

頁数の制限があったためか、執筆者の意図が読者に十分に伝わるかどうか疑問に感じられる論文もみうけられたが、全体として本書が日本の農山漁村研究の発展に貢献することはまちがいない、この分野を志さず研究者の必読書となろう。

(田林 明)

小葉田 淳監修、金坂清則・海道静香編集・執筆
『福井県史 資料編16上 絵図・地図』

福井県 平成2年2月

「解題・解説」B4判 130頁

収載図47枚55点 11,000円

『福井県史』の一冊として『資料編16上 絵図・地図』が刊行された。先年『福井市史 資料編別巻 絵図・地図』（平成元年3月）として大部な地図集が出ているため、これで我々にとっては福井県（越前・若狭）に関係する古地図資料は、極めて身近で利用しやすいものとなった。

本書は複製された55点の収載図とB4判130頁におよぶ別冊『解題・解説』（その中に挿図として100点以上の地図が写真化されている）から成り立っている。

複製された収載図の内訳は、古代2点（正倉院宝物である東大寺開田図の糞置村、道守村図）、近世34点（幕府撰国絵図、城下絵図、町絵図、村絵図、川絵図等）、近現代19点（明治期の地形図・地籍図、空中写真）の55点から成り、特に空中写真を採用して同一地域を比較させることは、この種の書物としてはめずらしいが、歴史の証言者としてそれが極めて良好な“古地図”であることをあらためて教えてくれる。

55点の収載図を通して見ると、中世の地図を欠くとはいえ（別冊『解題・解説』には太良荘樋指図と坂井郡河口・坪江荘近傍図、白山参詣曼荼羅が挿図として載っている）、時代的には奈良時代から昭和50年代までの遠大な時間的範囲におよぶ地図が概観できることになる。このことは対象地域が越前・若狭であればこそ可能なことではあるが、それだけでは十分ではなく、本書の形に仕上げるまでの編著者の努力なしには不可能であることはいうまでもない。また、この収載図は越前・若狭の地図史の時間的経緯が、つまりはわが国の地図史のそれと重なり合っていることにも気付かせてくれるのである。

編著者は別冊『解題・解説』の中で、本書の目的を以下のように述べる。

「その一つは、福井県及びその母体となった越前・若狭二国の歴史の理解に役立つよう精選した絵図・地図・空中写真を、形式の面でも大きさの面でも見やすく、利用しやすい形で複製すること。第二は、その鑑賞や活用にとって参考となるような情報や素材を提示すること。そして第三は、このようなこ

とを通して、明治以前の地図である絵図やそれ以後の地図・空中写真という空間資料が、面白く、見て楽しく、しかも歴史資料としても有用なものであることを理解していただくと共に、本県史への関心が、文書史料とは異なるこの種図像資料への関心と理解を通して高まるようになること。以上の三つである。」

絵図・地図資料を見やすく、利用しやすく、かつ歴史資料として有用なものであることを理解させるということであるが、それはまさに「言うは易く」の世界であって、実際にそれらをめざした場合、経費面をはじめとして、あらゆる困難に出会うことになる。たとえば、収載図№3からはじまる国絵図などの大型地図を、本書のごとく鮮やかなカラー写真で細部にいたるまで、利用者のために読ませようとするれば、その撮影上の苦労は並大抵のことではない。特に本書は、地図は部分図ではなく、全体図を本意にされており、編著者の苦闘する姿が目浮かぶ。豪華な複製古地図集はともかく、中身の色彩や文字まで判読、つまり利用できる古地図関係書物が、県市史レベルはもちろんのこと、一般啓蒙書にいたるまで見ることが極めて稀なことは、故無きことではない。中身までの利用ということは、歴史資料を提供する側の姿勢として本来あたりまえのことではあるが、その対象が古地図資料となった場合、そのことはぜひとも理想ともいえるべき姿なのである。

本書の場合は、55点の収載図の美しさ、大きさ（個々の図が大きく、さらにそれぞれが、アトラス形式の図帳ではなく、個別に見られるマップ形式になって納まっている）、鮮明さ、加えてそれら個々の図の利用度を一層広げる別冊『解題・解説』の記述のこまやかさとレベルの高さ、豊富な挿図・表と文献等々、その理想に限りなく近いものであると思えるのである。

たとえば図の解題を見ても、収載図1の越前国足羽郡糞置村開田図と2の越前国足羽郡道守村開田図の2図共通の解題には、以下のような小見出しがある。“概要、麻布、図の縦の長さ、縮尺、絵画的描写とその意味、方位とその表示、国印、作成時期、里と坪の表示、彩色、荘園の広がり、荘園の地域的ありよう、庄所と交通条件、絵画的描写と彩色、方格線の意味、課題と歴史的な自然”。さらに加えて、東大寺開田図の諸特徴を整理した表1が付けられているといった豊富な内容である。

これは編著者が解説の中で「解題の分量がこの種の書物にしては長く、かつ長さが一定しておらず、しかも、定説化していないことまでも記している点も、本書の特色である」と述べ、その方が地図への関心をよびおこし、新たな発見にもつながる、との考えに基づいているものであろう。これはまさに、あらゆる層の利用者の立場にたった考えと思われ、公立博物館で常に利用者と対面している評者なども含め、古地図資料の活用・普及の面で大いに参照とすべき態度と思われる。ただ、評者個人の感覚からすれば、他に比較して古代の2図の解説が圧倒的である点とか、指示文献の書き方（指示のところさらに指示があったりといった点）にやや不満がないわけではないが、これなどはもちろん些細なことである。

このように、本書は徹底的に利用者側の立場にたった資料集で、資料の公開という点からまことに好ましく、古地図を歴史資料としてさらに語らしめるものである。そしてこれらを可能、実現させたものは、編著者の古地図資料に対する深い思いではないかと想像される。編著者は本書のため約4,400点の絵図を確認し、約3,100点を実見し、そこから55点を収載図に、その2倍の数を挿図に精選し、何らかの形で引用されたものを含めても、本書で紹介された絵図・地図は編著者の見たその数の1割だということ。そこまでの選択、精選を行った編著者が、古地図自身にできるだけ自らを語らそうとしていると思えるのである。もちろんこれは評者などの勝手な想像であるが、たとえば資料の材質や大きさそのものへのこだわりなど、その例ではなかるうかと思える。

これまでの古地図資料の解説書では、その中身の情報（地形の形態であるとか、地名や石高、作製者等の名前）の説明が主であり、その材質まで踏み込んだ記述をしたものはみられない。本書では地図の素材まで注目され、楮、雁皮、烏子といった紙質が、当時におけるその地図の価値を物語る要因であるとの指摘は興味深い。さらに収載図として複製する場合でも、もともと和紙に描かれたものは現在の和紙上で複製する、といったことにこだわった念の入れようである。また、地図自身の大きさについても、広げて見るためという利用者側の目的は従来漠然といわれていたが、そこに含まれる文字情報の質量という作製者側の意図が大きく影響しており、わが国の地図の大型化は奈良時代から近世国絵図にいたる

までの伝統と述べられていることも、あらためて確認すべきことと思われる。

その他、体系的に膨大な絵図・地図を実際に調査された編著者ならではの指摘も数多い。このことは福井県域（越前・若狭）という特定地域とはいえ、わが国の地図発達史全体に関わる問題を十分に論究

できる、またすべきことを示している。本書は卓越した古地図資料集、解説・研究書であり、将来にわたって息長く、当該分野の研究と発展に寄与するものと信ずる。

（三好唯義）